

私の編曲について

すべてのピアニスト、そして将来の若いピアニストにピアニストとして蓄積してきた経験を伝えたい、と常日頃から考えていた。しかし、いわゆる「教師」になるつもりはなく、ほのかな明かりを手に、似たような仲間の道先案内をする電灯のような存在でありたい。己惚れのように聞こえるかもしれないが、私の人生はまるで「天の意志」であるかのように、ある日ふと、ごく自然に、啓示された。運命の女神が事前にひいた道の上を、歩み続けてきたような気がする。しかし、その道は、山あり谷ありで、決して楽なものではなかったが…

子供の頃、即興演奏に夢中になっていた私は、大人になってプロの演奏家になってからも、つかの間を楽しむ個性的な小曲で演奏会を締めくくるのが好きだった。即興演奏をしていると、まるで体に火がついたように身も心も心地よく溶けていくような錯覚を覚える。自分の能力を超えていくプロセスでもある即興演奏によって、ピアノ技術の限界を少しずつ広げているように思う。ある瞬間に湧いてくるインスピレーションに身を委ね、テーマの内容とフォルムを自由に選びつつ、最初の2、3小節は自分のイメージをやや制御する。すると、手が自然に動き出して、自分の内なるイメージを次々と描き出してくれる。息わず熱中してしまうこのような練習で、私は閃光のようなひらめきの中に、未来のピアノ芸術のあり方を「捉える」ことができた。

パリに到着して数ヶ月後、市内にあるパテ・マルコーニ・スタジオで、アーティスティック・ディレクターが、有名な旋律をもとにした即興演奏を録音しないかと提案してきた。勿論私は即、承諾した。その手の「遊び」は大好きだった！ この日は、何となくロッシーニに凝ってみた。数時間かけていろいろ弾いてみた結果、「ラ・ダンツァ」と『ウィリアム・テル』序曲のパラフレーズが生まれた。その後、録音した自作の即興曲、パラフレーズ、編曲をすべて聞き直していくうちに、新しい音楽への道を切り開き、ピアノ技術の新たな可能性をあみ出していくのが、神によって定められた自分の連命であることを悟った。だがそれは、大きな責任だった。のちに録音をもう一度、細かく聞き直してみたが、あまりにも多くの革新的なことをやっているのだから、驚いてしまった。どうやって？ と聞かれても困る。気がついた時には、指が動いていたのだから。私はただ、芸術に忠実に仕えるしもべでしかなかった。そこで私は急に、未来のピアニストのために、これらの即興演奏をもとにした「ピアノ奏法のための方法論」を書くことを思い立った。だがここで大きな問題が立ち上がった。即興演奏という極めて特殊な音楽フォルムを、どの演奏者にも解説・演奏可能な「作品」にすべく、紙面に書き留めるのは、非常に難しい。鋭い耳とかなりの根気が必要うえ、ピアノを熟知している人間でないとできないことだ…案の定、この仕事に興味を示した候補者たちは、次々と諦めてしまった。テープの速度を落として、音を一音ずつ聞いても不可能だ、ということだった。

ある日、息子のジョルジュ Jr. が、自分も試してみたい、と言ってきた。当時、25歳だった彼は、固い意志と熱意をもって、作業にとりかかった。彼は、テープをスローで（逆からも！）聞きながら、音の高さをひとつひとつ丁寧に記録していった。そして、次第に私の即興演奏の一部を楽譜にすることに成功した。私はその楽譜を一小節ずつ、細かく読み直し、自分の感情やイメージをより忠実に反映した真の「作品」に仕立てていった。まさに創造性をかき

たてるような、素晴らしい仕事だった。そしてのちに、絶対的な信頼を寄せていたハンガリーのピアニスト イシュトヴァン・カッサイに出版作業全体の統括をお願いした。

この楽譜を開くピアニストの中には、「演奏不可能だ！」と叫び出す者もいるかもしれない。だが、決してそのようなことはない。フランツ・リストも、自作の編曲を出版した当時、誰もが、あのような曲を弾けるのは彼しかいない、と考えていた…だが、時は流れ、演奏技術も進歩し、今ではプロのピアニストのみならずアマチュアまで、彼の書いたヴィルトゥオーゾ的な作品を、さほど苦勞せずに弾いて楽しんでいる。ここで紹介する作品に関しても、同じことが言えるのではないだろうか。明日のピアニストは、これらの曲をより楽に弾きこなせるに違いない。「親しみやすい」作品として、そのうちレパートリー曲になってくれれば嬉しい。

1982年から1983年にかけて、もともとピアノ連弾曲として書かれたブラームスの「ハンガリー舞曲」15曲を録音した。ブラームスは、当時非常にポピュラーだった旋律をもとに、自由に想像を巡らせ、21曲の作品を書いた。作品の簡潔なスタイルには、彼ならではの個性がうかがえる。ブラームスは「ゴテゴテと装飾音の多い」リストの音楽を嫌っていたが、私はあえて、時代を超えて、この二人の偉大な音楽家をハンガリー的な旋律をもとに「仲直り」させようと考え、ブラームスの構築的な精神とリストの即興的な才気を融合してみた。

続く5曲は1958年以前に録音したもので、「演奏会用練習曲」と題した。

リムスキー＝コルサコフ作曲の歌劇「サルタン皇帝の物語」の間奏曲「熊蜂は飛ぶ」は、過去にも様々な楽器用に編曲されてきた。私の編曲は、オクターヴが完璧に弾けることを前提にしている。長いカデンツァのような構造で、内なる半音階の流れが途切れないように注意しなければならない。オクターヴに関しては、よくその奏法の「鍵」を聞かれるが、私はいつも「1に練習、2に練習！」と答えている。

「トリッチ・トラッチ・ポルカ」は、おそらくヨハン・シュトラウス2世が書いたもっとも有名な作品ではないかと思う。主題をもとに、カデンツァ風に連なる橋のようなヴァリエーションを書いた。一種の「自由なパラフレーズ」だ。反射神経を鍛えるのに最適。

「ルーマニア幻想曲」は、中央ヨーロッパで広く知られている民謡をもとにした即興曲で、「緩—急」という伝統的なスタイルをとっている。

「悲しきワルツ」は、フェレンツ・ヴェツチェイ（1893-1935）という人が1916年に書いた作品である。一世を風靡したことのあるヴァイオリン奏者だが、残念ながら今は忘れ去られてしまった。当時、非常に流行った曲で（歌詞までつけられた！）、サロン音楽定番のレパートリー曲だった。私も、ブダペストのピアノ・バーで弾いていた頃、この曲の主題を使って即興演奏してほしい、という注文をよく受けた。その頃の思い出として、このドラマチックで情熱的な幻想曲の編曲を思い立った。

最後に付け足した「ハンガリー舞曲第5番」は、1957年に録音したもの。最初の編曲とは異なるため、新たな側面からこの曲を見つめ直すきっかけになれば幸いに思う。

ここに記した数ページの説明によって、新しい世界の扉が開かれ、あまり型にはまらない、より個性的な演奏の可能性が見出されれば幸いに思う。

ジョルジュ・シフラ